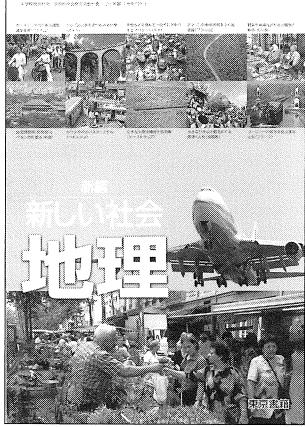


いま「国土」の教育はどう行われているのか －過去と現在、そして将来世代にむけて－

[第2回] 中学校社会科教科書と国土教育・ひと教育

森田 康夫*

今回は、中学校社会科の検定教科書(平成22年度、東京都において、最も多くの地区で採択されている「東京書籍」の社会科教科書)を取り上げ、地理、歴史、公民の3分野ごとに、特に国土と人との関係に関する記述(国土の現状や課題、社会資本の役割や整備効果、社会資本整備に携わってきた人々の苦労、世界の国々との比較等)にフォーカスをあて、時間軸に沿って比較検討した。



1. 中学校・地理分野教科書の比較

教育内容を系統的に習得させることが強調されるようになった昭和30年の学習指導要領以降、地理分野の検定教科書の学習項目・内容はほとんど変わらないが、「現代化カリキュラム」と呼ばれた昭和46年検定教科書と現行の平成17年検定教科書を比較すると、全体頁数が約2/3に削減されていることがわかる(本文323頁→本文215頁)。

また、内容的にも、前者の教科書では、日本の地誌、

世界の国々の地誌を系統的・網羅的に学習することができたのに対して、後者の教科書では、ごく一部の地誌しか学ぶことができない(例えば、世界の地誌については、アメリカ、中国、フランスについてはしっかり学べるが、あとはブラジル、マレーシア、オーストラリア、ガーナについて補足的に学べる程度で、それ以外の国については全くふれられていない)など、学習指導要領の内容の変遷に伴い、学習

第1回：小学校社会科教科書と郷土教育・リテラシー (4月号掲載)

1. みんなが幸福になれるように
2. 国土を学ぶということ
3. 学習指導要領の変遷
4. 小学校社会科教科書の比較
5. メディアとリテラシー
6. 輿論(よろん)をつくっていこう

第2回：中学校社会科教科書と国土教育・ひと教育 (本号)

1. 中学校・地理分野教科書の比較
2. 中学校・歴史分野教科書の比較
3. 中学校・公民分野教科書の比較
4. 天は自ら助くる者を助く

第3回：高等学校地理教科書と地理教育の復権 (6月号予定)

1. 高等学校「地理B」教科書の比較
2. 高等学校地理教育が抱える課題
3. 地理教育復権に向けた取り組みと今後の展望
4. 人事を論せんとせば先ず地理を究めよ

第4回：高等学校歴史教科書と「歴史の深層としての国土」 (7月号予定)

1. 高等学校「日本史B」教科書の比較
2. 高等学校「世界史B」教科書の比較
3. 歴史の深層としての国土
4. おわりに(人と国土と信仰と)

* 國土学アナリスト、国土交通省国土技術政策総合研究所(総合技術政策研究センター)

EDUCATION CONCERNING COUNTRY AND CITIZENSHIP IN LOWER SECONDARY SCHOOL (by Yasuo MORITA)

範囲がかなり限定的になっていることがわかる。

しかし、そのような環境下にあって、現行の教科書(東京書籍)は、「深めよう」や「発展」といった発展的学习コーナー等も活用して、次のような魅力あるテーマを取り上げ、積極的に記述していることが特徴として見て取れる(図1)。

- 利根川水系の水利用(0.5頁)
- EUの交通ネットワーク整備(1頁)
- 世界の中におけるわが国の自然環境の特徴(頻発する地震、流域面積の狭い急流河川、台風の襲来、自然災害対策など)(14頁)
- 過疎・過密問題及び世界の都市形成史(8頁)
- 新幹線や高速道路の整備による効果(時間的短縮、産業立地、地域の緊急医療への影響)(5頁)

2. 中学校・歴史分野教科書の比較

昭和30年の学習指導要領以降、歴史分野の教科書の学習項目・内容はほとんど変わらないが、昭和46年検定教科書と現行の平成17年検定教科書を比較すると、地理分野と同じように全体頁数は約2/3に削減されている(本文297頁→本文220頁)。

また、歴史分野の教科書では、わが国の歴史の大きな流れと各時代の特色を理解するため、歴史的出来事や歴史上の人物・文化遺産を中心に通史が取りまとめられているため、国土形成の歴史や社会資本

の役割や整備効果、社会資本整備に携わってきた人々の苦労など「国土教育」に関する記述は極めて限定的である。現行の教科書(東京書籍)における「国土教育」に関する記述はおおむね次の通りであるが、いずれにせよ通史の中のごく一部に極めて限定的にそれが記述されているため、「国土教育」を学ぶ材料として、歴史分野の教科書に効果的な役割を期待することは難しい。

- 渡来人が灌漑用のため池をつくる技術を伝えた
- 平城京の整備、都と国府を結ぶ道路の整備
- 班田収授法と墾田永年私財法
- 行基のみちぶしん(橋や用水路の整備)
- 平清盛による兵庫港整備
- 農村における灌漑用水路の整備や管理(室町時代)
- 太閤検地
- 東海道など五街道の整備と宿駅・関所の整備
- 江戸幕府の新田開発
- テーマ学習:野田市の醤油づくりと利根川の河川工事
- 伊能忠敬の日本地図
- 水野忠邦による印旛沼の干拓
- 鉄道の開通(イギリスの産業革命)
- 鉄道の開通、汽船の運航、郵便制度や電信網整備、北海道開拓(明治維新)
- スエズ運河の開通(欧米の植民地政策)
- 鉄道ネットワークの整備と国有化(明治時代)
- テーマ学習:北関東鉄道の建設と地域社会
- 関東大震災後の復興・都市計画(大正～昭和初期)
- アメリカのニューディール政策(世界恐慌)

とは言え、検定教科書の中には、社会資本整備に取り組んだ先人の苦労や評価を積極的に取り上げて



図1 現行中学校地理分野教科書の記載例^③

- おもな地震の震源と火山の分布
- 自然災害とその対策
- 交通がもたらす地域の変化

表1 昭和27年検定教科書(東京書籍)・単元学習I 「都市や村の生活はどのように変わってきたか」の構造と内容

章	節	項	具体的記述内容
〔第1章〕 村、町、都市 の歴史(27頁)	1. 村の成り立ち	(1)村の昔ーくらしよい場所	・現代のくらしよい場所(平地のまんなか)は、必ずしも大昔に住みよい場所ではなかった ・狩猟(移住)生活から、稲作中心の定住生活へ。その際の第一の目安は「飲料水」の確保であった ・江戸時代の初め、江戸町内に井の頭池のわき水や多摩川の水を引き込む工事が行われた ・江戸時代の中頃になって、ようやく井戸掘りの技術が進歩し、平地に井戸を掘る家が現れた
		(2)新しい村ー自然との戦い	・人口増加に伴って新たな水田の開墾が求められた ・山奥の沢から長い用水道を平地の村の田に引いている例、ため池の例 ・江戸時代以降の新田開発の苦勞(堤の整備による水利改善、干拓による耕地確保)
	2. 村や町の結びつきはどのように 変わってきたか	(1)村と村との結びつき	・村と村→ぐにとくに→中央集権国家と地方→地方の独立
		(2)宮から都へ、とりでから 平地の城へ	・宮から都へ→とりでから平地の城へ→城下町の繁栄(江戸100万、大坂40万、京都40万)
		(3)物の動き、人の動き	・市から市場町へ、物の集散、水上交通と港町、江戸の五街道と宿場町
		(4)都市の生活、村の生活	・武士と町人、都市の生活、村の生活、小百姓の苦しみ
	1. 近代的な都市 や町はどのように 変わってきたか	(1)封建社会の崩壊	・近代工業の芽生え、農村近代化のきざし
		(2)近代的な都市や町の発達	・近代工業と都市；能代(製材)、瀬戸・有田(陶磁器)、室蘭・北九州(石炭)→交通・運輸の発達した京浜・阪神・名古屋への集中 ・貿易港；博多や堺→平戸や長崎→横浜・町の発達；伊香保(温泉町)、一ノ関(街道町)等
		(1)郷土のおいたち	・米の自給、作物や手工業の変化、農村の不景気と更正運動、生産生活の変化、交通の発達と村の産業、北海道の開拓、生活の向上
		(2)郷土の歴史の研究法	・郷土の役割の複雑さ、自然の背景、歴史の変わり目・先人の努力
〔第3章〕 村や町や都市 の生活(36頁)	1. 私たちの住む 郷土の現状の研究	(1)研究上の心がまえ	・他の地方と比較して、郷土の特徴をとらえるようにすること。 ・統計データや図表を活用することにより、具体的でわかりやすい表現とすること。
		(2)人と土地と生産	・検討の視点；人口と人口密度、産業別人口、土地・農地利用状況、林業や水産業の現状
		(3)人と物の動き	・検討の視点；移住と出稼ぎ人口、生産物出荷量、商圏、人の動き(通勤人口、通勤範囲等)
		(4)都市のくらし、いなかの くらし	・検討の視点；商業の種類の違い、時給生活の楽しさ、都市の便利さ、人々の結びつき等
	2. 世界の都市や 村の生活	(1)さまざまな国での村の生活	・村のなりたち(砂漠のオアシス、大河川流域の村、異民族や外的から身を守るために周囲を塀壁で囲んだ村、円形集落と散村の分布の相違)、牧畜の村、低湿地との戦い(オランダの干拓)、植民地の村、新大陸の開拓
		(2)外国の都市の発達	・ギリシャローマ時代；アテネ・スパルタ(都市国家)、100万都市古代ローマ ・自由な都市へ；ヴェネチア、ジェノヴァ、ハンブルグ、ケルン、ミラノ、フィレンツエ等 ・巨大な都市へ；ロンドン、パリ、ベルリン、マドリード、ウイーン ・新大陸での都市のでき方；ニューヨーク、フィラデルフィア、ボルチモア等→「滻の線」に沿って発達 ・都市の大きさ、都市の生活や役割、鉱業都市
〔第4章〕 都市やいなか のくらしをよ くする努力 (20頁)	1. 生産を増加し、 くらしを豊かにするにはどうすれば よいか	(1)生産の増加	・暮らしを豊かにするためには、学校や乗り物、公園など公共施設を大切に扱う公徳心を持つ努力とあわせ、生産性を向上させることが必要。 ・そのためには、耕地の開墾、技術の革新、品種改良、林道整備、大規模な利水工事等々が重要。
		(2)経済生活の向上	・さらに、仕事の手順の効率化、機械化の促進、商品流通のための交通施設(道路、鉄道、港湾)の整備、協同組合の組織化等を促進する必要がある。
	2. 郷土の生活をよくするにはどうすればよいか		・病院や保健所、診療所の設置、国民健康保険制度の充実 ・堤防強化など治水事業の実施 ・住宅の耐火構造化、住宅密集地区における道路や空地の整備による都市火災の防止 ・交通信号設置等による交通事故の防止 ・学校、公民館、図書館、公会堂、公園等の整備による美しく文化の高い生活の実現 ・都市計画や国土計画の重要性

いる事例も無いわけではない。

例えば、『中学生の社会科 歴史 日本の歩みと世界』(日本文教出版)では、「見て・感じて・つかむ歴史」の欄で、わが国の近代化遺産(幕末以降、昭和戦前期までの近代的手法によって建造された産業・交通・土木関係施設など)を取り上げ、日本の近代化に大きく貢献した施設として、その歴史的な役割や文化財としての価値について考えることを促している。

また、『改訂版 新しい歴史教科書』(扶桑社)では、戦前の日台関係史に関する、「人物コラム」

欄で「台湾の開発と八田與一」と題したテーマを取り上げ、一人の土木技術者を詳しく紹介している。八田與一は、台湾南部の嘉南平野の上流に巨大なダムを作り、嘉南平野を広大な穀倉地帯に変貌させた、今も台湾で尊敬されている日本人土木技術者である。

一方、系統的学習教科書になる以前の単元学習の時代には、「都市や村の生活はどのように変わってきたか(昭和27年検定教科書・中学2年)」や「世界の諸地域はどのように結びついてきたか(同・中学1年)」といったテーマを学習単元として取り上

げ、それぞれ約100頁を割いて、都市や村の形成の歴史、これらを結びつける交通の発達の歴史、都市や村の生活をよくするための社会資本整備の歴史と今後の方策、海外の都市形成・交通発達の歴史との比較等をとりまとめている中学社会科教科書が存在していた(いずれも東京書籍)。このような教科書で授業を受けた者は、わが国の国土形成の歴史を学ぶことで、自分たちが先人たちの努力の成果のうえで暮しているという実感を共有できたであろうし、また、長年の国土への働きかけの努力が結実した「現在の国土」をどう改善して次の世代に渡すのかについて、思いをはせることも可能となったであろう。さらには、世界の人々の努力を知ることで、この日本という国土をよりよくしていくために自分たちが今何をなすべきかについて、世界をも視野に入れた自立した物差しで考えることができたのではないか(表1)。

3. 中学校・公民分野教科書の比較

中学校社会科では、政治・経済・社会について学ぶ授業を「公民的分野」と呼称しているが、戦後の中学校教育の中で、この「公民的分野」ほど期待され、そしてその内容が大きく様変わりしてきた教科はない。

戦後、この公民的分野は長らく「政治・社会・経済的分野」と呼ばれていたが、昭和44年に「公民的分野」と改称され、その後、昭和52年および翌年の学習指導要領改訂に伴って、「公民的資質」の育成という小学校から高等学校にかけての統一方針が掲げられることになり現在に至っている。

検定教科書のもととなる学習指導要領における公民的分野の授業時数と授業内容の変遷を見てみると、まず、授業時数は地理分野や歴史分野同様、大きく削減されており、「現代化カリキュラム」の昭和44年学習指導要領と現行の平成10年学習指導要領を比較すると、年間140時間(週4コマ)から年間85時間(週2~3コマ)へと、約4割も授業時数が削減されていることがわかる(昭和30年以前の学習指導

要領では、授業時数は定められていない)。

また、授業内容について比較すると、「章」と「節」レベルのキーワードを比較するだけでも、「芸術」「宗教」「政府」「家庭」「家族」「学校」「職業」「文化」といった言葉がどんどん消えていき、「個人」「人間」「世界」といった単語に置き換わっていることがわかる。

次に、具体的な検定教科書(いずれも東京書籍)で内容の変化をレビューした結果、以下のような4つの大きな変化が確認できた。

(1) 家庭教育の扱いが小さくなった

昭和27年の検定教科書では、家庭教育を第1学年で扱い、『单元Ⅰ 家庭や学校の生活を明るくするにはどうすればよいか』で、学校生活に約40頁、家庭生活に約30頁をあてていた。私が学んだ「現代化カリキュラム」の昭和46年検定教科書でも、『第1章 わたしたちの家庭生活』に20頁が割り当てられていた。それが現行の平成17年検定教科書では、『個人と社会生活』という1節の中で、実質2頁弱しか充てられていない。

(2) 政府(行政)や公務員の役割が小さくなった

次に、政治分野について、昭和27年の検定教科書では、中学第3学年の『单元Ⅱ 政治と生活はどのようにむすびついているか』で、政府や公務員の役割に約25頁をあてていた。社会資本整備関係でも、鉄道や道路の整備・修繕、災害復旧事業、河川改修や利水事業、住宅建設等の取り組みやその役割が、『政府の行う事業』として約2頁にわたり記述されていたし、『公務員』という節では、約3頁にわたり公務員の役割や課題が述べられていた。これに対して現行の平成17年検定教科書では、行政に関する記述が9行、公務員に関する記述が7行という扱いである。

(3) 自由主義から平等主義へ

基本的人権の取り扱いの変化も興味深い。公民教科書における「自由権」と「平等権」の扱いを見ると、戦後から昭和50年代前半まで、教科書は、自由権と平等権をフラットに取り扱うか、あるいは平等

権よりも自由権を重視する傾向にあったが、昭和50年代後半以降になると、逆に平等権の方を重視するように転換している。そして、現行の平成17年検定教科書では、自由権が2頁であるのに対し、平等権は8頁となっている。

私の子供たちが中学受験をするさいに使っていた学習塾の教材を見ながら感じていた違和感(自由権と平等権の比重の違いに関する消化不良のようなモノ)は、この「自由権よりも平等権を重視する傾向」を指していたのだ。私が教育を受けた当時の公民教科書では、これほどまでの扱いの差はなかった。この20~30年の間に何があったというのだろうか。民主主義の基本的思想は変わっていないはずである。

アメリカによる戦後教育改革の影響が大きかったとはいえ、昭和27年の検定教科書における自由権と平等権の取り扱いは、白眉中の白眉である。第3学年の『単元I 民主主義はどのように発展してきたか』で約90頁を割いているが、そのバランスと内容の踏み込みは以降の教科書に類を見ない。そして、圧巻は最後のまとめの6頁。福澤諭吉の自主・独立の精神を紙面にいっぱいに展開している。私は、このような迫力のある教科書をこれまで見たことがない。

昭和27年検定済教科書「改訂 新しい社会科」(東京書籍)
第3学年・単元I 「民主主義はどのように発展してきたか」
目次
第1章 民主主義の理想は自由、平等である(8頁)
第2章 自由と平等ということ(7頁)
第3章 古代の民主主義(9頁)
第4章 信仰の自由(6頁)
第5章 アメリカにおける民主主義の誕生(13頁)
第6章 議会制度のはじまり(8頁)
第7章 自由主義について(6頁)
第8章 フランス革命と民主主義(7頁)
第9章 民主政治の原理(5頁)
第10章 経済上の民主主義(8頁)
第11章 基本人権の発達(6頁)
第12章 自主、独立の精神(6頁)

(4) 文化・芸術や宗教知識教育の空洞化

最後に、文化・芸術や宗教知識に関する教育の空洞化を取り上げたい。昭和27年の検定教科書では、第3学年において『単元IV 文化はどのように発展してきたか』という168頁もの独立した単元があり、

「私たちの生活と宗教」「私たちの生活と芸術」「私たちの生活と科学」という見出しの下、それぞれ50頁ほどの分量を使って、宗教、芸術、科学について記述していた。

しかし、現行の公民分野の教科書では、自由権の一部として「自由にものを考え、思想や信仰をもち、自分の意見を発表することは、わたしたちが生きていくうえで大切なことです。」と出てくるのみである。文化・芸術や宗教知識に関する記述は、現行の地理分野・歴史分野の教科書でも取り上げられているが、地誌や歴史の全体の流れの中で、断片的に紹介される程度の内容であるため、本質的な部分まで踏み込んで書かれることはない。

戦後、自立すら許されなかつた時代でさえ、これだけの学習指導要領や社会科教科書を作つて、次の世代の国民の教育に力を注いだ先人達の努力を、現世代のわれわれは今こそ見つめ直すべきではないか。次の世代に引き継ぐべき公民教科書は、半世紀以上前に出版されたこの昭和27年度版教科書ではないであろうかと思うのである。

4. 天は自ら助くる者を助く

「天は自ら助くる者を助く」という格言ではじまる英国の作家サミュエル・スマイルズ(1812~1904年)の名著『自助論』は、明治維新直後に中村正直の翻訳により『西国立志編』として日本に紹介され、その思想は近代日本の基礎を作る上で大きな影響を与えた。そして、その熱い想いは現在でも全く色あせず、われわれに前向きで、能動的な生き方を示してくれる。わが国の「国土教育」を、そしてそれを支える「ひと」の教育を導く光明としても。

「どんな国家であれ、幾世代にわたる人間の思想や活動の蓄積を経て、現在の姿に発展してきた。社会の階層や生活の状態にかかわらず、たゆまず黙々と働いてきた人は多い。土を耕す者、鉱山を掘る者、発明家、探検家、製造業者、職人、詩人、哲学者、そして政治家……。彼らの貢献によって偉大な成果が生み出され、しかもその成果は世代を超えて伝え

られながら、いっそうの発展を遂げていく。(中略)
その意味で現在の人間は、祖先の技術や勤勉によつてもたらされた豊かな財産の後継者なのである。そして、われわれはこの財産を、損なうことなく自らの責任において守り育て、次代の人々に手渡していくかねばならない。(中略)大切なのは一生懸命働いて節制に努め、人生の目的をまじめに追求していくことだ。」

[第3回につづく]

[参考文献]

- 1) 大石久和／国土学事始め、毎日新聞社、平成18年3月
- 2) 大石久和／国土学再考「公」と新・日本人論、毎日新聞社、平成21年2月
- 3) 文部科学省ホームページ
- 4) 三浦朱門／全「歴史教科書」を徹底検証する、小学館、平成17年7月
- 5) 小山常実／公民教科書は何を教えてきたのか、展転社、平成17年7月
- 6) 海後宗臣／昭和27年検定済『新しい社会科 中学1年(上・下)』『中学2年(上・下)』『中学3年(上・下)』、東京書籍
- 7) 鶴飼信成他24名／昭和46年検定済『新しい社会 地理的分野』『同歴史的分野』『同 公民の分野』、東京書籍
- 8) 五味文彦、斎藤 功、高橋 進他45名／平成17年検定済『新編 新しい社会 地理』『同 歴史』『同 公民』、東京書籍
- 9) 大濱徹也他10名／平成17年検定済『中学生の社会科 歴史 日本の歩みと世界』、日本文教出版
- 10) 藤岡信勝他6名／平成17年検定済『中学社会 改訂版 新しい歴史教科書』、扶桑社
- 11) 田邊 裕他37名／平成13年検定済『新しい社会 公民』、東京書籍
- 12) 川田 侃、尾藤正英、田邊 裕他33名／平成4年検定済『新しい社会 公民』、東京書籍
- 13) 鶴飼信成他32名／昭和55年検定済『新しい社会 公民』、東京書籍
- 14) 西岡虎之助／昭和36年検定済『新しい社会 3』、東京書籍
- 15) 新しい社会編集委員会／昭和30年検定済『新編 新しい社会 ⑤』『同 ⑥』、東京書籍
- 16) S・スマイルズ(著)、竹内 均(訳)／スマイルズの世界的名著 自由論－深く考える習慣が、自分の限界を破る！、三笠書房、平成15年3月
- 17) 森田康夫／「国土教育」の視点から見た社会科教科書の検証と次世代教育論、JICE REPORT Vol.16、(財)国土技術研究センター、平成21年12月